

抗インフルエンザ薬における処方箋解析

2023年12月以降の抗インフルエンザ薬の処方数はコロナ禍以降最大となりました。また、インフルエンザ感染者の時空間解析により流行パターンを可視化しました。

日本調剤グループで情報提供・コンサルティング事業を行う株式会社日本医薬総合研究所（本社：東京都千代田区、代表取締役社長：橋爪 敦弘、以下：日本医薬総合研究所）は、独自に運用する「月次処方データサービス RI-CORE」をもとに、医薬品市場の処方傾向変化を分析してきました。今回は抗インフルエンザ薬についての処方動向の分析を行いましたのでお知らせいたします。

使用データ : 月次処方データサービス RI-CORE
対象期間 : 2017年1月～2024年1月
対象店舗 : 対象期間以前に開局し、期間内には閉局していない日本調剤の薬局
対象疾患 : インフルエンザ
対象成分名 : 下表参照

成分名	先発商品名	剤型	投与回数
オセルタミビルリン酸塩	タミフル	内服	1日2回5日間
バロキサビルマルボキシル	ゾフルーザ	内服	1回
ラニナミビルオクタン酸エステル水和物	イナビル	吸入	1回
ザナミビル水和物	リレンザ	吸入	1日2回5日間

※ 本レポートでは、後発品であるオセルタミビルもタミフルと合算して集計しており、グラフ等の結果表示においては、「タミフル」と表記しています。

集計患者数の定義について下記の表に示します。

患者数	対象薬剤を処方されたすべての患者の人数 (同一患者が対象薬剤を複数回処方された場合はそれぞれ1人として集計)
シーズン	第36週から第35週まで ¹

1 国立感染症研究所." インフルエンザとは". <https://www.niid.go.jp/niid/ja/flu-m/590-idsc/12404-fludoko-2023.html>. (2024-2-19)

1. 抗インフルエンザ薬を処方された患者数の推移

まず、2017年1月から2024年1月の長期間にわたる患者数の時系列推移を Fig.1 に示します。一般にインフルエンザの流行は12月から3月²までとされており、本解析結果においても2020年まではその流行パターンが認められました。

しかし、日本で初のコロナ感染者が報告された2020年1月から日常的にマスクを着用する行動変容が全国レベルで生じたことにより、2022年11月まではインフルエンザが流行しない状態となりました。

そして、2023年5月に感染法上の分類で、コロナ感染症が5類に引き下げられ、マスク着用も個人の判断へと移り変わり、2023/24 シーズンでは例年より早い8月から流行開始となり、2023年12月まで増加し、2024年1月にはピークアウトしているように見えます。

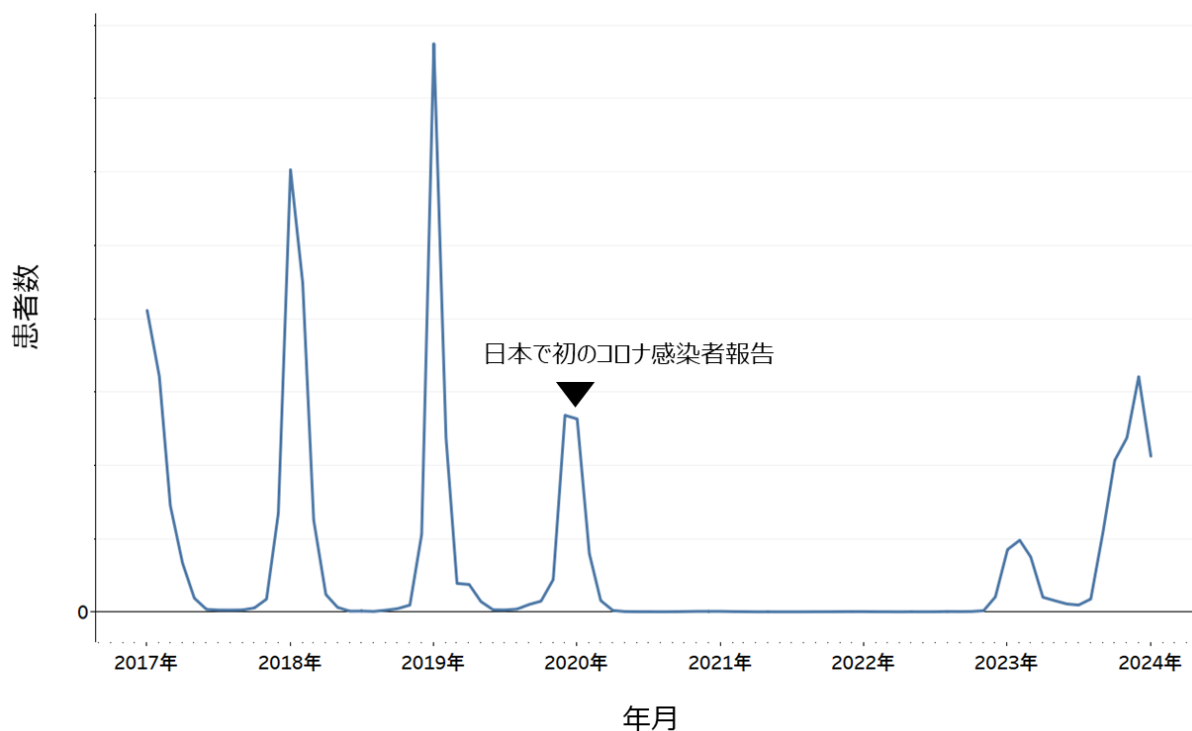


Fig.1 抗インフルエンザ薬を処方された患者数の推移

²厚生労働省.” 令和5年度インフルエンザ Q&A”

https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/kenkou_iryuu/kenkou/kekkaku-kansenshou/infuleza/QA2023.html, (2024-2-13).

2. 処方された薬剤の種類の変移

次に、使用された薬剤の患者数割合について、時系列推移を Fig.2 に示します。抗インフルエンザ薬を処方された患者数及び薬剤種類別の患者数割合はシーズンごとに集計しました。

各薬剤の剤形に注目すると、ゾフルーザが上市される以前の2017/18シーズンまでは吸入剤が50%以上を占めていました。しかし、ゾフルーザが上市された2018/19シーズン以降、内服薬の割合が50%以上になりました。また、投与回数に注目すると、2018/19シーズンではゾフルーザのシェアは同じ1回投与のイナビルより高くなっており、ゾフルーザ上市による1回投与の薬剤における選択傾向の変化が確認されました。

ゾフルーザ上市時から現在までのシェアの推移に注目すると、2018/19シーズンでは、ゾフルーザの割合がタミフルに次いで2番目に大きくなりましたが、2019/20シーズンでは急激に減少しました。これは、2019年にゾフルーザに対する耐性ウイルスの出現が報告され³、ゾフルーザの処方が一時的に控えられたためです（2020/21シーズンおよび2021/22シーズンは患者数が非常に少ないため参考値程度）。一方、2022/23年以降のシーズンでは、ゾフルーザの割合が2019/20シーズンを上回りました。

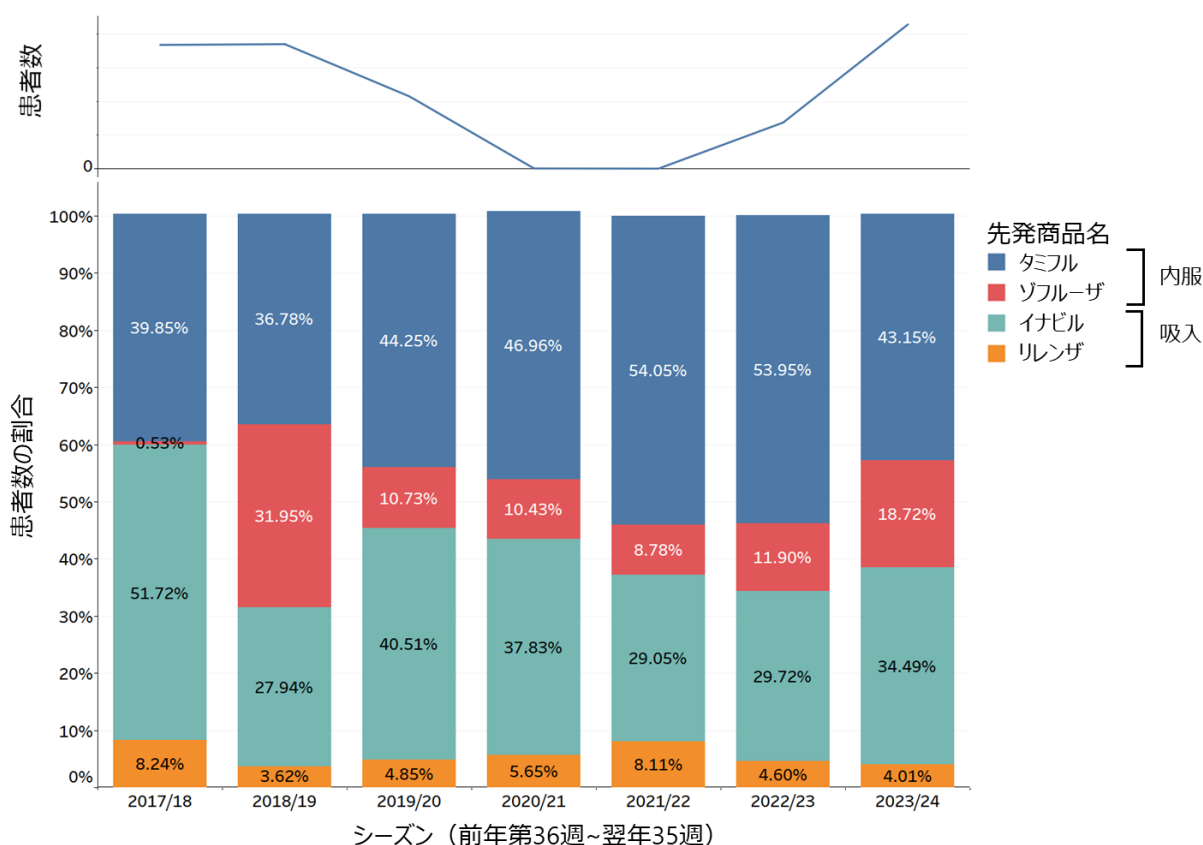


Fig.2 処方された薬剤の種類の変移

上部：患者数の推移／下部：薬剤ごとの患者数の割合

3 国立感染症研究所."新規抗インフルエンザ薬バロキサビル マルボキシル耐性変異ウイルスの検出".

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/flu-m/flu-iasrs/8545-468p01.html> ,(2024-2-16)

3. インフルエンザ患者数の時空間解析

最後に、東京都にある日本調剤の薬局の処方箋データから得られた患者数の時空間解析の結果を Fig.3 に示します。処方箋データの時空間解析では、薬局の位置情報と患者数を地図上にマッピングし、時系列で解析することで、感染流行パターンを可視化しました。このように、当社では処方箋データに限らず、位置情報やその他の多岐にわたるデータを統合し解析を行っています。

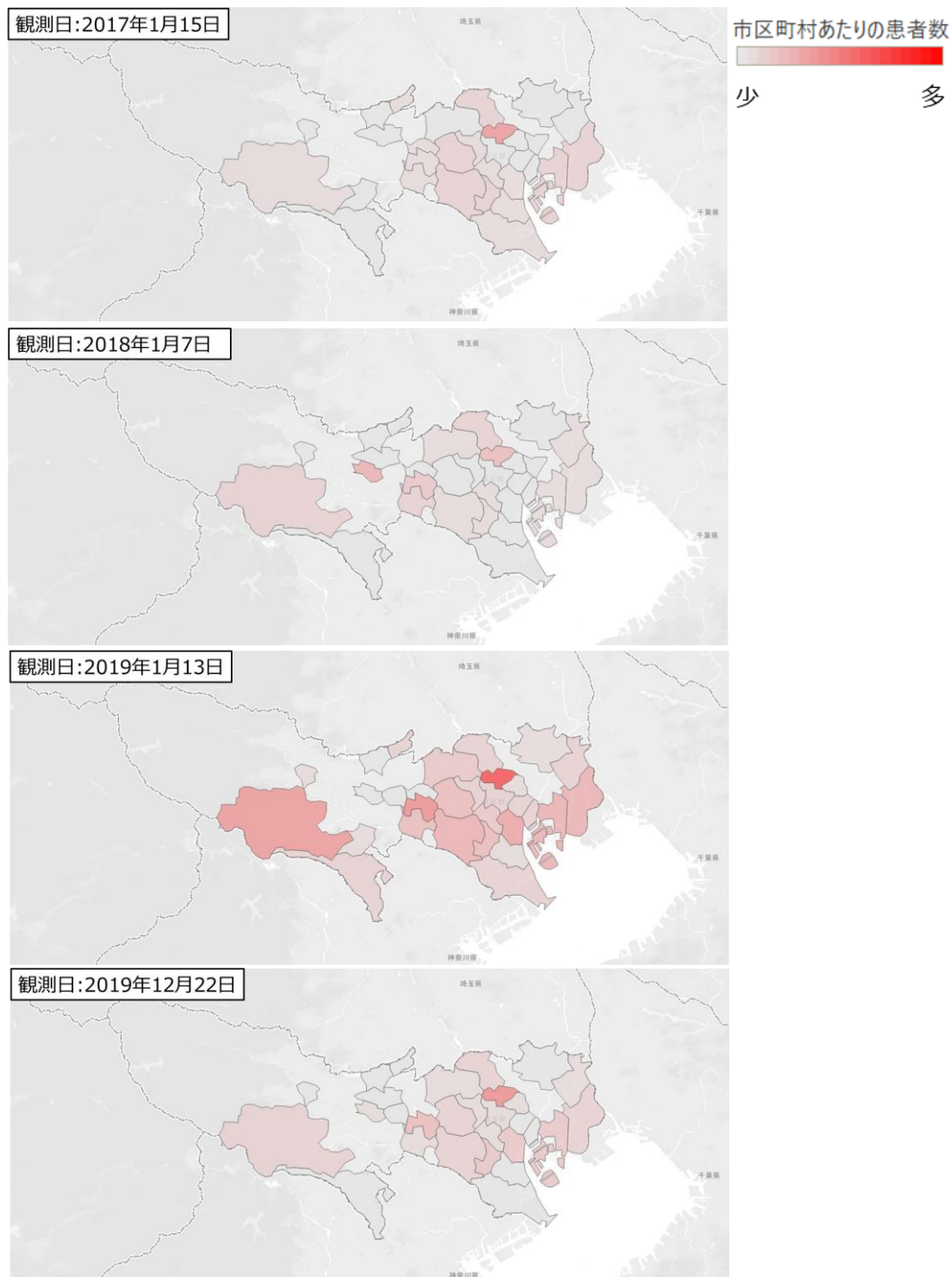


Fig.3 インフルエンザ患者数の時空間解析

国立感染症研究所の流行レベルマップにおいて、各シーズンではじめて警報が発せられた時点を観測日とし、市区町村ごとの患者数（1週間、1薬局あたり）を表示。

今回、当社独自の月次処方データサービス RI-CORE を用いて抗インフルエンザ薬の処方動向の分析を行い、その一例を紹介しました。日本医薬総合研究所では今後も、さまざまな薬効群の処方動向について分析を行い、発信してまいります。

【RI-CORE について】 https://www.jpmedri.co.jp/service/medical_information/ri-core/
日々収集される調剤情報を月次または週次で集計、お客さまのニーズに応じてカスタマイズした多彩なテンプレートを作成、自在な分析機能により目的に合わせた分析結果を定期的にお届けいたします。

【株式会社日本医薬総合研究所について】 <https://www.jpmedri.co.jp/>
日本調剤グループ各社を通じて培った医療情報資源を基に、医薬業界の健全なる発展、成長に寄与し、国民生活の向上に資する価値ある情報サービスを提供するために 2012 年 1 月に発足しました。製薬・ヘルスケア企業、医療機関・保険者さま・保険薬局からのさまざまなニーズに応えるため、処方箋情報・レセプト情報をはじめとする各種医療ビッグデータを基盤に、「医療の質の向上」、「医療費の適正化」、「国民の健康寿命の延伸」といった日本全体の医療課題に貢献してまいります。

【日本調剤グループについて】 <https://www.nicho.co.jp/brand/>
日本調剤グループは、すべての人の「生きる」に向き合う、という揺るぎない使命のもと、調剤薬局事業を中核に、医薬品製造販売事業、医療従事者派遣・紹介事業、情報提供・コンサルティング事業を展開する、多様な医療プロフェッショナルを擁したヘルスケアグループです。医療を軸とした事業アプローチによる社会課題解決を通じて持続可能性を追求し、すべての人の「生きる」に貢献してまいります。

【本レポートに関するお問い合わせ先】

株式会社日本医薬総合研究所

TEL : 03-6810-0812 FAX : 03-5288-8692

E-mail : soken-info@jpmedri.co.jp

本レポートに関わる無断での引用、転載及び複製は禁止します。

当社は、本レポートの内容および閲覧者が本レポートを通じて得る情報等について、その正確性、完全性、網羅性、有用性、最新性、適切性等、その内容について何ら法的保証をするものではありません。

本レポートの閲覧者による、これらの情報の利用により、万一何らかの損害や不利益等が生じても、当社は一切の責任を負いません。